

ンコンは先の見通しがきく、コンニャクは腸内の砂をはらい、牛蒡は地中にしっかりと根をおろす、土台がしっかりしているといういわれがあります。

食は故郷を見直す。その土地の風土にあった料理が郷土料理です。「くるみもち」もおはぎを枝豆のあんでくるむというところから「くるみもち」とよばれるようになったと思います。

また、カヤの実が虫下しで重宝されていました。妙寺の堀越観音の境内で、カヤの実をひろった時の気持ちを歌にしてみました。



故郷賛歌を森川隆之先生の作曲で、歌をうたいながら、講演を聞いていただいています。和歌山県内に故郷をひろめようとまわらせていただいています。

昔、お風呂をたくときに、ガスも石油もないころで、薪をたいたんですが、追い炊きにむぎわらをくべた時の、あの透き通った赤い色がわすれられません。

また、農業についてもお話しますと、土にも酸素を吸わせて、お日様の光をあてて、土を育てていました。今は有機農業をしておられる方が、土をなめて土の味をみておられました。農業の基本は土であったことが今も昔も変わらないことが良く解りました。

その頃、私が姑から教わった茶粥が、私の里とは違った茶粥でした。それは、茶粥が炊きあがる時に、大豆を炒って、出来上がった茶粥の中に入れると、なんとも香ばしい茶粥ができました。いまでは、高級品となった、天然鮎も、素焼きでうるかと味噌をまぜたものをつけていただきました。

ジャコもそうでした。練炭に長い時間かけておいていただきました。ゴマも今は「炒りゴマ」が売っていますが、開封したときだけは、いい香りがしますが、暫くおくと香りがなくなる、どれをとっても、今は忙しい時代でお湯を注ぐとラーメンができ、また、ごはんまで食べれる時代になりましたが、食べ物はゆっくりと、時間をかけて手間もかけていただくように、忘れられた何かを思い出していただきたく、いつも思っています。

和歌山は、食文化がほんとうに発達しており、紀伊半島はすし半島と言っていいほど、たくさんの種類があります、柿の葉すし、すずめ寿司、わさび寿司、などです。これらを、伝承していかなければならない。

岩出町の根来にある子守唄があります。子供をおんぶしながら、歴史を歌った歌が特徴です。すさみ町に守の生活改善のような歌もあります。

「わが子かわいけりや、守に餅くわせ。守がこけたら、子もこける」

「ねんね、根来へ行きたいけれど、川がおとろし、紀ノ川が」

もうひとつ、和歌山県が子守唄のルーツであるといふような、ことを、思っているのに、古座町のこのは神社という神社のおまつりの、祝詞が「ねんねんよ、おころりよ」となっています。いまは、その神社は子供の神様としてお祭りされています。和歌山へ、いやいやこられた徳川頼宣公がありとあらゆることでご活躍され、秀吉をお祀りするために東照宮を建てられ、家康が身近に感じることもできるのが和歌山県であります。

もう一度、何かの折につけ、和歌山県を見直し、すばらしい故郷として皆さんにも伝えていっていただきたい。とお願いしまして、最後に子守歌を聞いていただきまして、私の講演を終わらせていただきます。

基調講演



囲炉裏端話

司会 野崎 丞

皆様大変お待たせ致しました。

私、囲炉裏端話の部の司会を仰せつかりました。野崎ですどうかよろしくお願い致します。

先程来よりお召し上がりいただいた、「おかいさん」のお味はいかがでしたか、お誉めいただければ、メンバーの奥様方も手作りかいがあったものと喜んでおります。今日はサービスの方も昔懐かしい割烹着を着用して頂きました。

さて、かつて、冬は囲炉裏端や火鉢の周りで、夏はうちわを片手に縁台で、おじいさん達やおばあさん達から胸をときめかせながら、又家族全員の会話を楽しみながらふるさとに伝わる昔話や伝説の話を聞いた事がお有りの方が多い事と思います。

そして現在、エヤコンやテレビ、子供達も自分一人一人の部屋を持てるような時代になりました。あの民話や昔話は段々と私達の周りから姿を消そうとしていますし、私達も子供達や孫達へ伝える素材や機会を逸しようとしています。

今こそふるさとに伝わる昔話しを見直して頂きたく今回お集りの各6クラブに関係する地域に伝わる民話等を「日本の民話」紀の国編(茨木 淳巳著)より抜粋し琴の音にも似たアルパの調べに乗せてお聞きいただきたいと思います。

それではまずアルパ奏者の上之山幸代さんを御紹介致します。

プロフィール

演奏 イン트로

民話 3話

演奏 さくらさくら

民話 1話

演奏 里の秋

民話 2話

演奏 川の流れのように

民話 はなおかせいしゅう

演奏 ふるさと

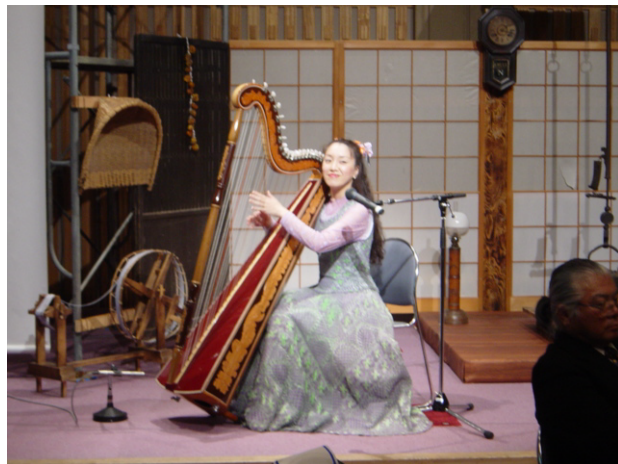


(上之山)

ふるさとを手話で表すと子宮と表現します、子宮から地球迄私達のふるさと、ずっとずっと大事にして行きたいものですね。

今日は最後迄聞いて頂いて有り難うございました。

尚民話は別紙にてご参照下さい。



キツネの恩返し

(打田町の昔話)



むかしの人は、空が明るいのに、そこだけ雨が降ってきたり、そのあと虹がかかったりすると「これはキツネの嫁入りや・・・」て云うたな。

むかし、むかしのことに打田の花野いうところに、お夏という別嬪のキツネが棲んでたんやとい。

そいでお夏も年頃になったんで、紀ノ川をへだてた段村(今の桃山町段あたり)のコン太とこへ嫁入りすることになったんやしよ。

そいで夕立を降らして人に見られやんよにして嫁入りしたんやそうな。

ま、そこまではよかったんやが、お夏はなかなか別嬪ギツネぐらいで、わがままやし、里の花野へはたびたび帰りがったんやと。

ある年、大風が吹いておまけに大雨が降り、紀ノ川は洪水になってしもて、土地の低い段村はすっかし水びたしになってしもたんやしよ。

コン太らの巢もグチャグチャになってしもた。

そこで修理する間、お夏はまた花野へ里帰りすることにしたんやけど、いつまでたっても紀ノ川の水が引かんのや。

お夏は大分考えてたけど、とうとう娘さんに化けてな、渡し船へ乗ることにしたんやしよ。

ところがその船でバツタリ花野の観音寺の和尚さんに乗り合わせてしもた。

和尚さんは、さすがに一目でお夏が娘さんに化けているのを見抜いたらしいわ。その耳もとで「おい、お夏よ、えろう美人に化けたもんやな」と云うもんやよって、お夏はびっくり仰天。

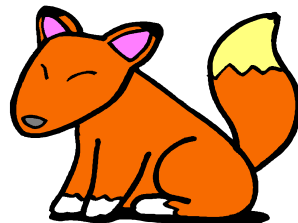
思わず手に握りしめてたお金を川へ落してしもたんや。もっともお金ちゅうたて、もとは木の葉やったよって、ヒラヒラと水に浮いて流れていっただけやけど・・・。

これにはお夏もびっくりしたわ。なんぼ木の葉をお金に見せるにしても、そのもとになる木の葉の予備がもうないんや。

おまけに船は川の真ん中やよって、どうすることもできやなんだ。

お金を持ってないと、「どこの娘さんや」とか、うるさく船頭さんに聞かれるやろし、お夏がモジモジしていると、船を下りる時になって、和尚さんがチャーンと払ってくれたんで助かったわな。

それからあと、この観音寺には不思議なことが起こって、お詣りする人が急に多くなり、お金もたくさん入ってきたので、和尚さんは立派なお尊を建てたんやて。おおかたお夏が恩返しをしたんやろ。



はなおかせいしゅう



華岡青洲先生はのし、今から二四〇年前那賀町の平山という在所に生まれなしたんやよし、江戸時代の末期のことやしてよし。

西暦一七六〇年十月二十三日、今まで晴れていた空がにわかにかき曇り、雷が葛城山にゴーと落ちて地を揺るがしたとよ、男のやや子が勢いのええ産声上げた、とたんに雨が止んでカーッとお陽さんが射して、悠々と白い雲が流れたそうな、大先生は雲にちなんで「雲平」と名付けなしたんやしてよし。今でも、この平山に青郷先生を訪ね来ると、いつも雪が鳴って大雨を降らすのやしてよし。

那賀町に「青洲の里」が出来た時も映画や演劇のスターがお基参りに来るたびに、いつも雷が鳴って大雨を降らす。青洲先生が喜んでいなさると地元の者が言うてなさるのよし。

雲平さんはお祖父様もお父様も医者さんで、小さい頃から病で苦しんでいる人達を救っている後ろ姿を見て育ちなさった。そんな雲平さんはいつの間にか「だれも治すことの出来ない病を治すことの出来る医者になりたい」と、夢を持つようになりましたのよし。

お父さんから「南蛮流」の医学を学んでいましたが、二十三才の時「京都に行ってもっと医学を学びたい。そしてどんな病でも治せる医者になりたい」と決意したのよし。

京都で勉強中にお父さんが亡くなつてしまい、妹の於勝さんと於陸さんが一生懸命に機織りして雲平さんの勉強の仕送りをしたのやしてよし。

そして雲平さんが京都での勉強の間に、お母さんが名手の庄屋本陣の娘「加恵」さんを見そめなして「雲平の嫁にと」華岡の家に迎えなしたのよし。

加恵さんは花婿の顔も見ずに嫁入りして、三年もの間、ジーと待っていなさったのやしてよし。三年の月日が経ち雲平さんが帰って来なしたのよし。

雲平さんは有名な「大和見立」(やまとけんりゅう)先生からオランダ流の外科医術を学んできたのやしてよし。

「病人を救うには、病の元を切って取つて、そして治す、それにはどうしても麻酔薬が必要や、絶対に必要や！」と、それから麻酔薬の研究に寝る間惜しんで取り組みましたのよし。

名も「青洲」と改めましたのよし、折しも世間は四年間も雨が降り続き、大飢饉となつていましたのよし。

近所の人等は「青洲が捨て猫やら捨て犬で麻酔薬の実験をして、殺すからそのたたりやないか」と噂し合っていましたのよし。

そんな折り、妹の於勝さんが乳癌で倒れなしたのよし、「お勝を殺したのは俺や、おれの医術が至らん証拠や！この悔しさは誰にも解らん」と青洲先生は悔やんで、食べ物もとらず痩せて側で見るのも辛かったよし。

妹を亡くした青洲先生は「お勝の死は無駄にしない」と、麻酔薬の完成を心に決めて、以前にもまして実験に取り組みなしたのよし。それをそばで感じていた母・お継ぎさんと、妻・

加恵さんが「わたえの身体を実験に使うて！」と青洲先生に競ってその人体実験を申し出たのやしてよし。そして、二人による何回かの人体実験によって、ついに「麻酔薬・通仙散」

が完成されましたのよし。

しかし、その何回かの人体実験で妻・加恵さんの両眼は失明してしまいましたのよし。



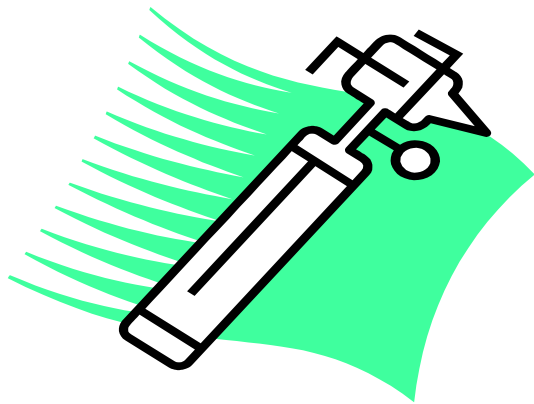


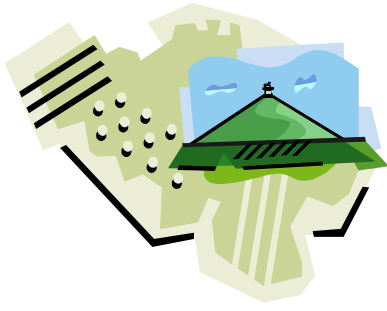
ついに、文化元年一八〇四年、丁度二〇〇前、麻酔薬・通仙散を使って、不治の雑病と言われていた乳癌の手術が成功したのやしてよし。世界ではじめてのことやしてよし。

京都の勉学から帰つて、二〇年の苦難の月日がたつていたんやしてよし。

青洲先生は四十六才になつていましたのよし。その後、青州先生は、三十年に渡り、実に百五十六回もの乳癌手術をし、また他の多くの手術もして、難病に苦しむ多くの人々を救われまたのよし。こんな話が全国に広まって、平山の在所へ全国よりおびただしい患者が殺到しましたのよし。又、青洲先生は診療にあたるかたわら多くの門下生を教授しましたのよし。その門下生は実に、二千名以上になりましたのよし。

そして青洲先生は「医者金儲けを望んではならぬ、患者を救うことだけを考へての」と、医者心構えをきつく教授されたと聞いていますのよし。





高野の榊一揆

（橋本市の伝説）

橋本市学文路の里・町並みを外れた畑の中に、ひっそりと戸谷新右衛門の墓と伝える苔むした墓石と顕彰碑が建ってるんやけど、そのいわれをお話しよの。

江戸時代、このあたりは高野山の領地やったが、新右衛門はここで庄屋をつとめてたんやと。

その頃の高野山は、修行を専門にしている学侶派の人と、宗派内の事務など一切をとりしきる行人方、それに全国を回って宗教を広めていく高野聖の三派に分かれ、新右衛門のところは、この行人方の領地やったそうな。

ところが毎年、年貢を納める頃になると、村人たちの血を吐くような恨みの声を聞くんや。

というのも、その頃、行人方の寺領では、全国共通の京榊を使わんと、讃岐榊を使用してたんや。

この榊は京榊に比べるとこ割ほども多く入るもんやった。ほいでお百姓さんらみな困ってしもたんや。

新右衛門が高野山へ交渉に行くと「お大師さんに供えてると思たらええんや」と云うて相手にもしてくれへん。

しつこく云うと、頭をクリクリにそられて「もうこれでお大師さんの弟子や、文句も云えやんやろ...」とあざけり笑われる始末。

そこで新右衛門も腹を決め、ある雨風の夜に証拠の讃岐榊を盗み出し、江戸へ直訴することにしたんや。

長い苦労を重ねて、ようやく幕府の寺社奉行に訴えることができてな、正・副の使者一人が高野山に登り「以後は讃岐榊の使用を禁止する...」と厳重に申し渡したんやと。

けど新右衛門は、当時の秩序を破って直訴したという罪で、江戸で三年もの間、牢屋にはうりこまれたんやして。

やっと享保七年の春に、自由の身となった新右衛門は、喜び勇んで紀州へ帰ってきた。

桜の花がハラハラと散る晩春の夕方、新右衛門は三年ぶりに夢にまで見たなつかしい故郷へ帰ってきて、村人たちの大歓迎を受けたわ。

江戸時代といえば、お百姓さんらにとっても、なかなか生き難い時代やったが、一身を投げうって村の人々の難儀を救うために、はるばる遠い江戸まで行き、直訴までするちゅうことは、並や大抵のことではできやんことやわな。

その新右衛門をお祀りした新右衛門堂ちゅうのが、近くの成就寺の中に残されてるで。



小野小町の話

(岩出町の民話)

なんちゅうても、むかしのミス日本ちゅうのは小野小町さんやろな。
平安時代のことやと思うけど、和歌山市の東の方の在所に根来ちゅうところがあったの、ここの尼寺に都から来たちゅうものすどい別嬪さんと、おつきの女中さんが滞在してたそうな。
実はこの人が小野小町さんちゅう人で、美しいことも美しいけど、オツムの方もまたすどくよかったらしいわ。
なかでも歌を詠ませたら、この人にかなう人はない...ていわれたぐらいやしよ。そいで、あちこちの男からモーションをかけられてな、もううるさてうるさてしようないよって、とうとう都から逃げ出してきたんやと。
ところが、それでも諦めきれやんと、探草少将ちゅう人が、はるばるここまで追っかけてきたんやしよ。
そいで「嫁さんになれ、嫁さんになれ」ちゅうて毎晩口説きにくるもんやよって、さすがの小町さんも閉口してしもてな
「では百日の間、毎晩お通いになったら、お望み通りにいたしましょう」て、返事をしてしもたんやて。
人間、恋の力ほどおとろしもないで。それから雨の日も風の日も、毎晩通うてきて、とうとう九十九日目の晩になってしもたんや。
「まさか」と思ってたのに = ... ・ と小町さんは泣いてるばかりやった。そいでおつきの女中さんが知恵をしばって、とうとう百日目の朝早よに、二人で逃げ出したんやて。
どんどん西の方をめざして、朝露にぬれるのもいとわず走っていったんやが、運の悪いことに深草少将に発見されてしもた。もうちょっとで追い付かれそになったんで、とうとう女中さんは小町さんの着物を借り、けなげにも身代りになって池へ飛びこんで、そいで少将の目をくらましたんやと。
その間に、小町さんはとうとう逃げ切ってしもたんやて。
このあと、小町さんはあてどもない旅を続けたんやが、八十八歳になった時にまた紀州へやってきて、山口の里に庵をつくり、心静かに余生を送ったんやと。
今も山口の遍照寺には小町さんの木像が残されてるけど、それが八十八の姿で、お乳もたれ下り、アバラ骨も浮き出て、こらもう無惨なもんやわ。

石童丸

高野山の伝説

石童丸ちゅう人の悲しいお話をしよかの。

石童丸が生まれた時には、お父さんはもういやなんだ。

なぜかというと、急に世の中にいや気がさして、お腹にいる右童丸やお母さんを残して、仏の道に入るちゅうて都へ旅立ってしもたんやと。

加藤繁氏というて小さいながらも苅萱の里の領主やったんやが、それにしても残された石童丸らは可哀そうやった。

石童丸は十三になると、なんとかしてお父さんに会いたいと思い始めたんや。

そいで母に頼みこんで、二人は都にいるという父を尋ねて遠い九州から旅に出たんやしよ。

険しい山坂を越えて、ようよう都に看き、お父さんを尋ね歩いたら、もう高野山へ移ったといことがやつのことに分かったんやして

ほいで二人はまた高野山をめざしたんや。

学文路（今の橋本市）まで来たんやけど、とうとう旅の疲れからか、お母さんは病気になり、宿で亡くなってしもた。

泣く泣くも母の葬いをすませ、石童丸はひとりで高野山へ登って行った。

そやけどお父さん(その頃は苅萱道心と名乗っていたんやけど)の消息は、なんぼ探しても分からんねや何日も何日も尋ね歩いたけど分からん。

疲れはてた石童丸はとうとう路傍にへたりこんでしもた

そこへ一人のお坊さんが通りかかってな、いろいろと石童丸を介抱してくれ

「しよせん父と子というのも浮世の縁に過ぎぬ、ここではみんな仏様のお弟子じゃ、こうして知り会うたのも何かの縁じゃ、わしの庵に住んで修行しなされ」

と云ってくれるんや。そいで石童丸も素直にその言葉に従うことにした。

ま、そのお坊さんの目には涙が一ぱいたまっているのには気がつかなんだようやな。

これが石童丸の実のお父さん、つまり苅萱道心やったんして。

それからあとも、石童丸はずうっと後まで、この苅萱道心を師匠として一緒に暮らしたんやとい。

けど、お父さんは、とうとう死ぬまで親子であることを明かさず、そいで薄々は気づいていた石童丸もついに「お父さん」とは呼べやなんだ。

今も高野山には苅萱隻ちゅう立派なお堂が建ってるけど、

どうやらここは二人が住んでた庵の跡らしいで。

